

それ以外の庭

庭園文化研究分科会 宇野 真一

1. はじめに

分科会活動で拝見させていただいた出雲・斐川エリアの庭も20か所を超える。デザインに共通性が見いだせるというレベルを超え、全体構成や景物の配置まで同じように作られた庭も多い。一般に根付いた言葉ではないが出雲流庭園と総称される。

様式の違いを〇〇風、〇〇様、〇〇流、〇〇式、〇〇派などと表現することがあるが、雰囲気やニュアンスの違いを示す場合は〇〇風、スタイルの違いを強調する場合は〇〇流・〇〇式・〇〇派といった使い分けも漠然とがあるようだ。「出雲流庭園—歴史と造形」の著者である小口・戸田両氏が出雲流と名付けたのは作庭手法の独自性を示すためと思われるが、〇〇流と称することで党派性（流派・流儀）の存在を想起されることもあるようで、庭師の方々からは「出雲流庭園など無い」、「出雲風の庭はあるが出雲流はない」という声も聞く。

しかし、出雲風では類似性の強さが伝わらず、出雲式や出雲派では党派性がより強調されてしまう。出雲様（いずもよう）ならば誤解は減るかもしれないが、あまり目にする表現でもなくゴロも悪い。やはり出雲流庭園と表現するしかない。

専門書から旅行雑誌まで庭園を紹介した文章を多く目にする。由緒ある庭の場合、作庭年代、様式、作庭者についての情報も添えられているが、〇〇流の庭という表現はさほど多くない。庭園の流派について少し調べてみた。

典型的な出雲流庭園



図-1 出雲文化伝承館（江角家）庭園



図-2 松翠苑（本高見家）庭園

2. 森蘊「日本の庭—作者・流派・作風」

庭園研究家として名高い森蘊（もりおさむ 1905～1988）に「日本の庭—作者・流派・作風」（1960）という著作がある。3章構成で“序章 日本の庭の諸問題”、“日本の庭の変遷”、“日本の庭の作者・流派とその作風”と章題がつけられ、日本庭園の黄金期（森は第1期～第3期があるとしている）に現れた作庭家の業績、人脈、作風などを解説している。

黄金期（第1期）は平安後期、藤原家ゆかりの庭が中心となる。秘伝書「作庭記」や当時の日記などから、延円阿闍梨・橘俊綱・静空・林賢らの名を挙げ、“作庭記流の作風”と題して詳述している。ただし、ここで用いられている〇〇流という表現は共通する秘伝書に基づいた作風という意味であり、技術継承を行う集団の存在を示唆するものではない。

同時代には仁和寺を中心に「山水并野形図」という秘伝書に基づいた庭づくりも行われ、これが鎌倉時代に活躍する仁和寺系石立僧の系譜に連なるとの私見も述べている。

第2期は南北朝から室町時代、この時代は夢窓疎石（夢窓国師）が傑出しているとし、その業績・作風を詳述するとともに後世に及ぼした影響にまで触れている。室町時代は石立僧に代わって庭づくりを専業とする技術者集団が現れた時代でもある。その中からは善阿弥の名を挙げているが、作風は將軍義政の趣味に沿うよう疎石のデザインを極端化したようなところがあり同時代人の評価は分かれるとも述べている。

第3期は江戸初期、ここでは小堀遠州、正春（遠州の弟）、権左（息子）、中沼左京（義弟）、久保権太夫（友人）、賢庭（遠州配下）、玉淵坊（遠州配下？）それぞれについて説明し、さらに‘遠州亜流の人達と作風’と題した一文も加えている。このあと桂離宮・修学院離宮に関する記述がつづくが遠州の半分以下であり、江戸中期以降は申し訳程度にしか触れられていない。

著作のサブタイトルに作者・流派・作風とあるが、内容は傑出した作庭家の業績・作風解説であり、流派という言葉は作風が似たものを漠然と指して使われ、技術継承を行う集団を定義するものではない。

庭園の造形美・芸術性に絶対的価値を置く森にとって、デザインの定型化に繋がりやすい流派の存在は関心の外だった。

3. 重森完途「日本大百科事典第2版」

日本大百科事典第2版の“庭園”の項は重森完途（しげもりかんと1923～1992）が解説しており。江戸時代についての文章の中に以下の記載がある。

——江戸時代に活躍した作庭家には、小堀遠州（えんしゅう）、片桐石州（かたぎりせきしゅう）、正阿弥、玄丹、本阿弥光悦（ほんあみこうえつ）らがあり、また青森を中心として大石武学（ぶがく）が武学流を広め、九州地方では石龍が夢想流を、出雲地方では沢玄丹が玄丹流を、伊予地方では吉良桜きょうが桑原流を流行させた。この何々流という形で、定型化にさらにいっそうの拍車がかかった。——（日本大百科事典第2版より抜粋）

重森完途には「日本庭園に於ける流派の研究」（1993）という論文もあるようだが実見できておらず、沢玄丹、大石武学らについて記述した根拠までは不明である。（玄丹・武学ともに実在を確認されていない）

しかし「出雲流庭園」の著者である小口・戸田両氏は玄丹流の実態調査のために出雲を訪れたと述べており、庭園研究者の間では沢玄丹という庭師の存在が認識されていたことは間違いない。なお、夢想流・石龍と桑原流・吉良桜きょうについては全く情報が得られていない。

4. ○○流として紹介されている庭園

4-1. 嵯峨流

夢窓国師の作風から出た造園の流派とされ、夢窓流ともいう。嵯峨流という名称は室町時代以降の庭園技法を記した「嵯峨流庭古法秘伝之書」からと考えられるが、流派としての独立した存在自体は疑問視されている。辞典の1語として残ってはいるが実際に目にすることはほぼない。

「和漢三才図絵」等には嵯峨流・四条流が二大流派として記載されているようだが、四条流についてはこれ以上の情報がない。

4-2. 玉澗流（ぎょっかんりゅう）

中国南宋時代の画僧芬玉澗（ふんぎょくかん）の山水図「玉澗様山水三段瀧圖」に由来し、山水図と同じ景観（築山を二つ設ける、築山の間を滝を組む、滝の上に石橋を組む、石橋の上を洞窟状にする）を持つ庭のこと玉澗流庭園と呼ぶ。これらの要素を完備していないが滝組の上に石橋が組まれている場合も玉澗流と称することがあるようだ。

4-3. 武学流

弘前を中心に津軽地方一帯にみられる庭園様式。明治・大正時代に盛んに作られ現在でも作庭されている。流祖は“大石武学”とされ大石武学流とも称されるが“大石武学”の存在を示す根拠は薄弱とされている。

(武学流については木佐技術士の2018年レポートに詳しい)

4-4. 玄丹流

松平不昧のお抱え庭師であった沢玄丹が作庭した庭。玄丹流と紹介されている庭は康国寺庭園と平田本陣記念館の木佐家庭園の2カ所だが、勝部家庭園、峯寺庭園などにも玄丹作か？とする伝聞情報があるようだ。

沢玄丹については出雲流庭園の流祖であるとか、短冊石や白石などを組み合わせたデザインを考案した人物との説明も目にするが、これも真偽のほどは不明である。

玄丹流庭園



図-3 康国寺庭園



図-4 平田本陣記念館（木佐家）庭園

5. プレ出雲流の庭

昨年のレポートで述べたように、私個人は出雲流庭園を大きく三つのグループに分けて捉えている。改めて説明すると、出雲文化伝承館や原鹿旧豪農屋敷に代表される短冊石・駕籠石が印象的な広大な庭（出雲流・典型）、斐川地方の一般農家に今も見られる定型化された庭（出雲流・一般）、これらに先行し影響を与えたと思われる庭（プレ出雲流）である。

大雑把な分類だが、プレ出雲流は藩主の御成りがあった重臣・本陣・寺社などが1790～1890頃に造った庭、出雲流・典型は明治維新後に経済力を増した豪農たちが戦前までに造った庭、出雲流・一般は戦後、屋敷を構えるまでになった庶民の庭というイメージである。

それぞれの庭に共通するデザイン・作庭手法に着目して出雲流庭園と総称している訳だが、200年以上にわたる作庭時期、その間の社会変動やオーナーの社会的立場を想像するとデザイン・作庭手法以外は全く性格が異なる庭として考える必要もある。

管田庵から始まるプレ出雲流には、いわゆる玄丹流庭園や本陣の庭が多く含まれる。立地環境を活かして眺望に優れており借景を取り入れた庭も多く、デザインヴァリエーションも豊富である。何より出雲地方にあって伸びやかで明るい印象の庭が多く、このイメージは出雲流・典型にも継承されていると感じられる。

プレ出雲流の庭園



図-5 管田庵（向月亭）路地



図-6 八雲本陣記念館（木幡家）庭園

6. 地方における庭園

学会の重鎮で平安後期の庭園を高く評価した森に対して、在野の重鎮だった重森三玲は鎌倉後期から室町時代の枯山水を最高の庭園様式とみなしていた。両者とも江戸中期以降の庭園については定型化が進み造形美に劣ると否定的評価を下しており、この庭園観が後世に多大な影響を与えている。

乱暴に言えば、京都の庭や禅寺の枯山水と比べれば江戸後期から明治・大正期に造られた“それ以外の庭”は価値が劣るに違いないという先入観を持たされてしまうのだ。庭園を造形芸術として捉える立場からは正しい評価かもしれないが、庭園の価値基準はそれだけではない。

当たり前の話だが、石組の造形美や抽象的意味に触れたくて庭を訪れる人しかいないわけではなく、より多くの人には緑や紅葉に包まれて静謐な時間を過ごしたい、あるいは開放的な雰囲気味わいたいなど様々理由から庭園に足を運ぶ。たまたま訪れた先で地方色豊かな歴史・文化の痕跡に触れられるならば満足感はさらに高まる気もする。

国内外を問わず人気・評価の高い足立美術館庭園、その造形美と維持管理への労力は尊敬に値するが、良くも悪くも観光名所化し過ぎてしまい一個人がゆっくりと時間を過ごすことが難しい庭にもなってしまった。専門家は造形美・芸術性で庭を語りがちだが、庭園の社会的価値と芸術的価値の相関はかならずしも高くはない。石組至上主義者の下す判断は姿を消しつつある地方・無名の庭園にとってどんなメリットがあるのだろうか。地方の歴史・文化という文脈に沿って、肩肘張らずしかし自信をもって“それ以外の庭”を語るべきだと思う。

参考文献

日本の庭 森蘊・恒成一訓 (朝日新聞社 1960)

出雲流庭園 小口基実・戸田芳樹 (1975)

大名庭園 白幡洋三郎 (ちくま学芸文庫 2020)